假字本末

下卷

W 52-2
B 17
3

ホシノ ブンコ

ショウワ 20ネン 5ガツ
ホシノ ユキノリ サマ ノ
ゴキフ サレタ モノ
カナモジカイ

帝國圖書館藏

千葉縣立
中央図書館

カナモジカイ 氏寄贈

57992

假字孜本末下巻

片假字

仲信友　稿

片假字の出來たる始末。藤原長親卿。僧名明魏孜倭片假字反切義解序ふ。此書の尾ふ仲春日花山耕雲散人搜求舊庫反故中而手魏愚草と記せ玉奥書ふ右一巻権實之正軌然音義軽録以帰庵倩見開秘密之奥藏示功不少矣嗚呼惜哉未盡曉而有益于後學已元和庚申歳夷則下弦阿闍梨良正一本知耕雲散人明魏為何世何人而ぎふ右一冊於難波速川氏家許借之命筆染紙彼花山散人明魏字耕雲自作和歌口傳則應永年中出家住山州花頂山焉續作者部類巻下曰凡僧明魏花山院流尹大納言師賢卿孫権中納言家賢卿子名長親南朝任権大納言和新續古今集亦新葉集載右大将長親詠歌有數首蓋長親歌六首アリ慕君至孝長歌慣音於我朝遭親喪凡三年居憂者唯遠世貞観年中紀夏井也近世正平年中藤長親耳長親入道明魏匪直也人者也于時正徳三癸巳歳孟

春日・以寧局今出河如雜と記せり。さて長親卿孫著
ハさる書なり。耕雲和歌口傳なり。文明五年北奥書
右之道深切著明者也云々。耕雲魏公上人所述而和歌
原長親卿法名號明魏又耕雲云々と見也。又源氏物語
注源氏小鑑なり。足利義持公へ進せら孫る書孫注ふ弘和元年より志るされ孫る仙源抄孫
とりふ卿の孫家の孫四三聲の定もなりて跋る假字定定なり儆字ひく假字意定字
ふ卿の孫家の孫四三聲の

太古之代未有漢字。君臣百姓老少口々相傳及乎應神天皇御世。始渡儒經學書契而凡國家用文字有真字有假字。真字對假字正也。假字對真字權也。字名義即物名也云々。都不過於以義為真字音為假字而已。字名義云云此より上巻に述すり。此舊事本紀日本書紀所用男假字數多是也。男假字とは上文音為假字と云て歌おどを書る字音の假字を云る形り。此さし次の文ふ真字假字とも云るあき形り。さて下文に伊呂波假字を女假字と云て事記萬葉集無用真字假字。以義與音相雜筆之。漢字形義をも字音形真字假字をも相雜へて書る由形り。但ひて書る歌もあれど。中に真字假字のみ用ひて書されとるを。かく云へ大槩をいふる形り。古事記をすべての文をそなあき歌も字音の假字のみ用ひて書

るを疎形り。到於天平勝寶年中。右丞相吉備真備公。取所通用于我邦假字四十五字。省偏旁點畫作片假字抑四十字阿行を除きて云ふ。音響反阿伊宇江乎五字。下は竪列五字とい反るおもむき形り。

此乃天地自然之倭語焉。是故竪列五字を横列十字。竪の一字おとよ。横は十字づゝあるゆ由なり。加入同音五字。合せて五十字。イ。イ。ウ。エ。ヲ。五字を重加入せりと形り。同為五十字。イ。イ。ウ。エ。ヲの五字を音をとして五十字反切の用を形すとは反るあり。且又横十字。隨唇舌牙歯喉備宮商角徵羽變宮變徵七聲。奇哉。世俗傳称之云吉備大臣倭片假字反切。五十音圖形り。有其口決矣。然後弘仁天長年中。釋空海造四十七字伊呂波。四十五字増補圖於二字以便于女童其體

則草書。此伊勢物語。古今和歌集所用女假字四十七字也。予學和歌樂音律其餘力觀吉備大臣倭片假字反切則闕無音義。竊注已意音義と云又横十字隨云々備云々と云ふ趣の義の闕て注さるべきなるをもて。今已が意をもて。新へとりと形り。そは本文ふ假字反切音義。まことに假字音義方位等て擧らきさり。其說たるよ要おけきば論たるべ。亦考全書以解片假字全書とハ。五十音圖書きるる片假字の本字を云ふる由形り。其を義解中よ。倭片假字くを。片假字よ作形る趣を解ふ假字畫解とあるふ。名曰倭片假字反切義解聊述由緒冠假字首云爾。と云ふ。かくてゐたゆる吉備大臣倭片假字反切口決を載て云

上父字行竪。下母字行横。其隅生子字

例　伊上父和下母反阿隅子
亦　也上父宇下母反勇二帰子

横行帰二父字一竪行帰スル母字一其帰二生スル子ノ字一

例　阿上父和下母反阿二帰子
亦　也上父勇下母反勇二帰子

まゝ五十音圖とゝく

□内五字序二所謂同音五字是也。改二乎伊作ルオ於囲井ニ者、空海所為ナリ矣。

アイウエヲ
ワ□イ□ウ□エ□ヲ

ヤ 井 イ エ ヨ

ナ ニ ヌ 子 ノ

タ チ ツ テ ト

ラ リ ル レ ロ

ハ ヒ フ ヘ ホ

マ ミ ム メ モ

カ キ ク ケ コ

サ シ ス セ ソ

上件。義解ハ倭片假字ニ畫解のとおろに載せ。かくの

ごとし。但し義解ハ又。片假字ハ傍ニ其本字を書添あり。其

明魏の考あるに畫解ハ別り。その本字當りがごき

もはからうへよ。まを要とあらねば捨て寫さば。
さらく上ふも云へるおとく此ほらふ。假字反切音義。假
字音義方位。まを追考伊呂波字畫解とくに記せるを。明
魏孫意をもて注せる說まく。甚しき誤あきば。すべく
とらば。本書を
見て知るべし。

今按るふ。吉備真備公をおもはるる多才の儒者ゆく。續
日本紀弘公の薨らまをし所ゆ。靈亀三年三月十二日通本
二年十二月十二日
とはるハ誤なり。從使入唐留學受業研覽經史該涉衆
藝。我朝學生播名唐國者。唯大臣及朝衡二人而已。天平
七通本五年誤歸朝。授正六位下拜大學助高野天皇師之
受禮記及漢書。恩寵甚渥。賜姓吉備朝臣。と見え。本朝文
粹ゆ載せる三善清行朝臣弘異見封事十二條の中に。

至(リテ)天平之代(ニ)。右大臣吉備朝臣恢(ニ)弘(シ)道藝(ヲ)親(ラ)自傳受(ス)。即令學生四百人(ヲ)。習(ハ)中五經三史明法筭術音韻籀篆等六道(ヲ)。と見えぞれど。音韻ぞ道ふも長き由ひ考りて形りそのかみ唐國より天竺より傳ちたりつる悉曇法を受習ひ来て。それより倣ひて皇國の正しき音聲を轉し。音位を換へて。新ふ五十音圖を作り。さて其對譯を用ふ法き漢字音の區(チク)別(オナジ)して一同からざるが故に。更ふ當時皇國通用ぞ字音。まて訓(ヨミ)をも假借(カ)りて。姑(シバラ)く對譯の者ぞ。ふ四十五字を定め。其字ぞ偏旁點畫を省きあぞりて。簡約ある一體の字を製りなんるが。ふ(ま)ま(ま)象片

假字なり。後は空海二字を補て。四十七字とおきる事。
反切義解序に見えたり。上は舉きるがごとし。
論ふばし。かく設置て。學生は便よく。音韻反切を習
はしめ給。又漢籍の訓ざ字ども。をも。加へ〳〵字旁に注
置ぬ。をもしろく。教授へ。あるものなるべし。遊仙窟の
古訓本。文保三年文章生英房の奥書に。嵯峨天皇書巻
士中撰得遊仙窟。召紀傳儒者欲傳受也。諸家皆無傳。夢
云々。伊時深愁歎云々。有老翁閉両眼常誦之。問讀遊仙窟
云々。翁曰我幼少自吝受此書云々。重申願教此書云々。
伊時付假名讀一帙畢といへる事見えたり。
翁諳誦之。伊時付假名讀一帙畢といへる事見えたり。古人漢籍の訓
此本片假字もて古き讀法をたけきり。さて字旁に假
ざ字を大事とせる趣ひやるばし。准へて云ず。
音づけは。音はは訓はまき。漢國のは訓はまき。漢國の悉曇字
注反切の如し。さて悉曇の事は。唐僧智廣が悉曇字
記は。悉曇は天竺の文字也。西域記は。詳其文字梵天所製。原
始聖則四十七言。遇物合成。隨事轉用とみえたるおれ

悉曇形原始形り。然るに明の世形始陶宗儀り著せる書史會要に。元世祖ゞ世帝師巴思八に梵文を創為國字。字母四十三云々とく。其字を行へるに蒙古字を製きる事を擧て。年にも載きり。あれいまだ蒙古字形り。此製字を元の事を。元史に。至元五年の事とし。吾朝の文永六年にあり。れのゞから斯方の五十音に似きるげにきこと。巴思八を元史には八思馬巴と書。西蕃形僧形を尊て帝師と称す。巴思八おのれゞ國風の悉曇法によりて字母を作らむとはるに。素より蒙古音の異形りしゝ。又其音に熟れざりしにゝ。四言を減して。四十三音をも字母を定めきるもの形るばし。あきに皇國の片假字に似きる事形り。然るも續日本紀寶龜九年十二月の下に。玄蕃頭從五位上表晋卿賜姓淨村宿禰。晋卿唐人也。天平七年隨我朝使歸朝時年十八。九學得文選爾雅等音。為大學音博士。於後歷大學頭云々と見えたる天平七年に當

ず。其表晋卿が事を。空海孙性霊集為藤真川華啓とあるに浮豊文の中ゐ。遥慕聖風。遠辞本族。誦両京之音韻。改三吳之訛響。口吐唐言。發揮嬰學之耳目。と云ふ。音韻は精しかるし人取ず。故推案ふるゐ。真備公の計らひく。晋卿を帰化とらしめ。もちら學びずと。て。音圖をも作り定め給ふるものゐる法し。義解孙序ゐ。天平勝寳年中に作りもへりとゐ法年頃もよく合ひくきもゐるゐり。古き史書どもを按ふるゐ。古ハ音韻孙學とくてゐる事ゐく。音博士とて字音を教る者を。唐國人を用ひらを つときもえくり。此晋卿をもすゐちち音博士は任さ

ずけるが。此後唐國人を任(ナ)さきたる事ども書をさ記さえぬを。真備公ぞ片假字を製り。反切の法を定めへるより始りて。漸ふ漢籍讀むちとの容易(タヤス)く成きるが故ぞ。ある音圖より據りて。今皇國言の奇(アヤ)しく妙なる趣を解き明らむるうへよりてを。かつ是まて漢字よむ料(タメ)よも立まさりて。いみじき世ども書らとぞ成きるを。あやしたまぐよいさをしく。ぞぐ〻ぐ〻ち思う孫まそそはりりき。上に引きるおとく。續紀よ野天皇師(トシテ)レ之受(ケキ)二礼記及漢書。恩寵甚渥。賜(シ)二姓吉備朝臣(ヨ)と見えるを。真備公の事を。拜(ス)二大學助(ニ)一高籍(ヲ)を讀せ奉りしるよも。はじめて此片假字を用ひく教(シ)授奉りへるを。ぞぐらしく便よくれもほしきる

こゝもありゝ。恩寵の殊より深うまし〳〵よりもやゆりけむ。
後世又草假字を女假字女手ゐども稱ひて。もたらす女
ざまのもれ〳〵ぞとく〳〵ゐれるゐる
よりもれもひ合せらるゝあり。然るゐそ真備公の五
十音圖中。本音と四十五字ゐりたるを。空海圖於ゐ二
音を增補〳〵。本音四十七字より為きりと。ゐる傳ハ。
まゝことに然る事ゐるゐ。其と空海入唐して。始て真
言秘密法を受。梵字學をも傳たり者りと云へゞ。悉曇
法を精〳〵明らゑ曉りて。舊圖を改訂して。於圖の二
音をも增補せるゝのまゝて。此空海の功も更ふあゝ
ゑで者〳〵。但〳〵衣恵ゐ音の差別と素より音圖ゐあり。
さて義解の序ゐ。空海造二四十七字一伊呂波一四
五字二增二補圖於一二字一と云ふるゝ者へり。音圖を正
十て後。伊呂波を作れりと云ふゐきゐとわゐゐり。

但し件の音圖。横行ハ。アワヤナタラパマカサと次第(ツイデ)
書るた。當時(ソノカミ)あほ精しからざりしゆり。又空海の改補
ハワ。行のヲをオとしやゆ行ハイを井とせるハ。舊より
空海の然改書るまゝ。又空海ハ改補の説まゆ見
て。明魏ハ私まゆのせられまるにゆ。いづれハ
精しからぢそ(コロ)の由ハ下さて又真備公の時世より。は
やく古事記。日本紀等ふ。以圍於遠ハ言れ差別正しく
字音をも正しく用ひ別書れまる事著明(イチジロ)く。少(サカ)も混(ヂ)ハ
きを。伴の公ハ音圖ふ。そハ井オを載らハざるもゆ
ゆる事まゆまゆと考ふるふ。公の世より以前(サキ)のむゆしハ。

漢字をよむまた。一字ごとにその音を正し明らめて。讀習ひ来れるものゝしてさぐりる事のゆらぎりしから。何ぞ混淆も無ありつるをかの悉曇法よりて音圖を製まなへ多くひ〳〵たるゆゑせて。かへりて井才。れ差別ゝ惑ひゆりて。姑く闕きゝ多るゝ多ゝ。後の世と多りて。此道ゝ習熟きる上ゝ意もて。深く難むぢきゝゆらば。比等ぢきゝたゆ世ゝ巴思ハ。創ゝ梵文を採て。蒙古の字十三を綴れるも。おのゞゝ似きる趣多り。四 然ゝ空海井才ゝ二音を補ひ生るゝよりて。音を備ゝた生ど。猶横行の次第ハよくもとゝのはざりつるを。又後

よ考正せる人々ゆ出来て。今の如くゐを定まりける
もの形る濱し。高野寺の僧れ著を〳〵て刊本ゑせる野
の講坊ゑ在て秘藏す。山名靈集ゑ。大師真筆の片假字ハ。當山
形るゑろ。いろ〻其寫を得て。おきゆの證ゑ。るもの
れど。かの國人ゑ。つらへやりけ。いまゞ詳ならぬぞ待遠形るや。さて音圖の阿
行ゑ於を屬ゆ。又竪行の音ゆ位置(オキドコロ)。又横行ゆ次第(ツイデ)ゆ
どの。中昔ゆ書ゑ見えず。今と差(スガ)ゐを予ゞ見ゆり
ゐを擧濱。まゞ阿行ゑ於を屬るハ。源順朝臣集
ゑ。あいうえおを一音づゝ。初と終の句ゆ上ゑおきて
よゑる歌五首ゆ。ゆゑ天文丙午寫本の和名抄ゑ。一
本巻首云(二)とて五十音を書入ゆるゆ。阿伊烏衣於ま

と和為有恵遠と書き。あた順朝臣の草本抄などに記さ
あるべし詳れるなり。又後人の書入さるる
らば。又管絃音義文治元年抄作。にも阿伊宇衣於と書き。釋
日本紀にも。阿伊宇江於之五音相通といふ事なり。於を必
属べき由。既に鈴屋翁の字音假字用格に論定られ阿行に
ぐるおとくにてうごかれ抄。但し件の證例を
假ぐいまだ心つかれずして然考定らきる事を
字を用格。以本郷の音呼之とい注し。長に奥字を用ひ
ら古法に符合きるるに。ゆゑ。でき。又字音の
用格於乎所属辨の中に。慈覚の記にハ短に於字
ち慈覚ひとり改て此於字を作きるハ。三蔵の口に呼と云々。
故五韻属濁暦ろの梵音を聞て。乎に非ず於抄ることを辨別きる
抄り。と云られ抄る。慈覚い兼和
年唐國に渡り。得値南天竺寶月三蔵。學西天悉曇。聲
分明。千古所疑氷釋と三代實録にえる。於乎所
の正しきうと抄音圖た。後に慈覚抄改ゆるなる
し。さて慈覚といふ人ゆるた。延
寺の座主圓仁の諡なり。
まと竪行抄音の位置の

異あるを。顕昭法橋が古今集注。文治年中著。袖中抄等よ。五音相通ずる事を力ケコクキの五音。ラレロルリの五音と云へるもよく。藤原教長卿の説ずと言へるもよく。久壽三年四十八歳と見えたる人なれば。教長卿も。補任を案るに。顕昭の世ざかりなれば。此時行アエオウイ行タテトツヒヘハハ行ヤエユヨワ行アイウエオ行カキクケコ行サシスセソ行タチツテト行ナニヌネノ行ハヒフヘホ行マミムメモ行ヤイユエヨ行ラリルレロ行ワヰウヱヲ。と定めて。イエアオウ。アヒウエオ。アヒウエオ。の音を用ひて。傳へられる樂家ずと譜ずの。ラ行の音を用ひて。イエアオウ。アヒウエオ。と定めて。物の音の低昂ずに。五音配ずるを。五連にして。又五十連にして。立てるなれば。上ふ拳と。但し上ふ拳は。私なるやうなれども。於良牟駄國。皇國。の音圖を寫すべき。おく。と此定を。也。加へて。おく行を。次に一行を。加へて。わ。ゐ。う。と。但し。為。ゐ。ぬ。と合字より書り。次に今と同じく。ゐ。ぬ。の次第を。う。かけ。き。て。ゐ。ぬ。と書り。但し。わ。の下より二字を空きり。

今圖を加へて寫せり。此書今より百五十年ばかりの前撰著せる書なりとぞ。件の音圖は、それより前なる泰の渡り始しいとしも遠からられねど、彼國人は古の一傳なるからば、件の音位置は、開口音なるからば、件の國音の事を論ずる說にはおもむく次第なるか、此方譯者は、はかもとぞ。然れど既く此方譯者は、はかもの與へ申るなるぞ。聞悟なくもの子神社司家なり。文明九年近くひらき、又越後國伊夜比子と云ふる五十連音圖なり。よりて寫せる彼國人の聞悟なくもの子神社司家なり。文明九年音圖なり。よりて寫せる字なるぞ。其音の位置、竪行をウオ。本字、吏道とふ朝鮮の諺文をウ。ス。ツ。エ。ア。と、横行をウ。ク。ユ。ム。ウ。と云ふ。彼國なるもとより定申るなるも斯方よりて古の譯者は、書整申るなるもなるも。其吏道は、辨說は、下卷に加へて注はばし。其吏道は、辨說は、下卷に加へて注はばし。其吏道は、辨說は、下卷に加へて注はばし

レ反同ニ同音ニ取ルニ下ノ字ヲ又一行之中切ヲ取リテ下切字ニ字トなりて。羅
為ニス正字ニ輕重清濁依ルニ上字ニ平上去入依ルニ下字ニ
摩阿可左多那波和夜の次第ハ記せる。於良牟駄ハ書きる音圖と。
朝鮮の吏道を書きる音圖の。横行ハ
異形なる。因ハ上に注ルせるがおとしあ行ハらをおもへ
ど。中世竪五音ハ位置。横十行の次第にも。亦異形なる説
ハ出来きる事もなりきるが。遂ハ今ハおとゝ正〳〵
定まりきるものなりけり。さて真備公ハ片假字製ら
れたる。唐國ハ例ハ倣ひ給ふあらせきる。其も漢籍
字林廣記などに見えたる。撫琴手法の譜ハ字の畫を
省きて作る種々の中ハ。泛をノ。消をム。綽をト。急をク。
吟をテ。掃をヲ。散をサ。按をウ。ハど作る。かゝる書ざま

かの國にも古き例あるべし。片假字のいとよく似たるをおもふべし。古より傳へられる樂家の譜にも。然サ體サマなるものあり。又此方コナタにも唐國に倣ひたるものあり。おのれも唐國に倣ひたるものなり。又此方にまた片假字出来たる後のものなりて摩魔ヵなどを。厂。密をウ。私をム。義をヰ。音をユ。訓をル。反をヘ。おとヽ。行從をイ。位をイ。權をオ。歳をヰ。ヵなど作カケる類いと多く。又佛書は菩薩をサ。サ。緣覺をヨ。ヨ。瑠璃をヨ。玉。玉。莊嚴をサム。殿閣をメ。メ。と作る類の書體も又多かり。かゝる書ざま。今もわれわれ用ふる人もあるなり。おのれまらもわれのぢゝらう片假字製れる意ふ相似たるはまおもふべし。

かくて其片假字ゆ簡便ゆるよりて。音韻の學ハさらゆ形里。惣て漢籍の讀ざゆ為ゆ用ゐるゆ。漸ゆまねく世ゆ廣まりて。字音にまきてゆををゆおれぷうちかゝぶゆる處々ゆを。讀む人の心々ゆ。字旁に注し著け。又よろゞの事をも書記ゆあらはしとゆ里ゆるゆ。まゆらく行ゆきゆ。つひゆ今のおとゝゆを有ゆる形象ゆし。さてその字旁ゆものせゆ事ハ。漢文の書籍どもの今も遺り傳ゆきゆるを見て知ゆるゆし。類聚符宣抄ゆ。天平九年六月廿六日。赤斑瘡を病む者ゆ治身禁食の事を示さゆる。太政官符の文中ゆ。咳嗽夫志波伎。或嘔逆坡麻と訓注あり。その加み片ゝあの普く世ゆ行ゆれざりけゆ證とゆべゆし。又古事記。日

本書紀抄などの訓抄。印本まゝ古寫本よりも片假字もて
とりぐゝに注せるゞ中にまた。ゆゑはやくより注傳へ
書りゝをもとおもたる。心とゞ免て見るばし。
かくてまゝ古人抄漢文よむに。近世とを別まて。一字
抄讀ざ法をもいみゞ知大事(オモキ)として。互(カタミ)に當否(ヨシアシ)を論ひ
さゞし所なる習俗あるけきゞ。師とあるゝ人の讀ざ法
を秘して。字中或を字旁抄などふ位を定免置て。朱點を
施(サ)して。弟子に教へ讀し免ある事あり。さゞ其朱點の
位抄處に。片假字もて訓ざまを注せる圖を作り置て。
弟子にも授くる事とし抄けき。おきを點圖と称ふ。俗わ

乎古止点圖といふ古止点なり。乎古止と称ふ由ふ。四聲音訓切點懸點反點漢呉音訓引合ひどを示ひも下に云ふ。又其中圖もあり。故師とあるは人の家々にて點圖異ふして。他門の人見て容易く知るおとを得ざりしひり。其點圖今も遺りあるがあるを。彼此寫せるものあり。其を一ッ二ッ寫して下に出すなり。さればど其を煩えしく。かれを見せざ知らざおきだ。其點圖にのみ隨ひてあるなくもあらば。又さる師をたのまずして書讀むものを。新に作るなくもあらぬ事おなだ。心々に讀とりて。上にいふ通るおく字、旁に片假字もて。其にみざまを注(シル)添ふるのおのづから漸に廣まり

也。熟(ナレ)来ぬる形る彦く。又よろづの事をも。意言(コヽロコトバ)を盡して滞るおとなくたやすく書記すおとなくえあれる形る彦なし。さ形ど祝詞宣命形ぞた。今も形れ古の例形れ。又漢文ゑ物真假字を加て書(シル)さ形ゑ斯(コナタ)方の言もて記さむゑも。片假字も形つき形て書(シル)も形れ来れ。ゑ形も形れ古のおとく。真假字と称ふ國音の字形りて。いさ形る形り。○朝鮮國ゑ諺文と称ふ國音の字形りて。いさ形せる中ゑ。其諺文ゑ假字ゑ似る趣あり。其諺文を漢字を交へて書もて。漢文の書け主バ。ゑ形も形れ古のよろづの事を注せる言ゑ訓ゑ形を注し。又諺ざまゑよく似き形り。さく其諺文を。彼國ゑ吏道とて形りける字形漸ゑ差錯(タガヒ)ぬ形りけるを。世宗と呼ぶ王ぞ時。皇朝の應永の末ゑ頃ゑ當て。正して改作形るもの形り。さく其吏道を写傳ふ形ると形ど。今形世ゑ遺き形るを。神代字なりとい形るゑと謾(ミダリ)説ゑ形て。上に神代字形りといへる五十音図とゆ形て。かの元形世祖ぞ至る形るゑあれ形り。又漢國ゑて。元五年ゑ製ら形ゑと形る蒙古字形事を。立御史臺及諸道提刑按察司。行(ニ)新製蒙古字(ヲ)。更号(メ)僧八思巴(ヲ)為(テ)帝師(ト)

築堡鹿門山に立て諸路蒙古字學と其世に史をうえ。近き頃清の太祖太宗文傳布自此始と清三朝事畧に見えたり。おのれらも皇國にして假字の行なるとは。はるかの後の事なれども。いづれも新に製りて。國中に教へ行ひ。皇國に假字は。公家にやおとさらに製らし。免の字なるとあらば。おのがうらに漸に行なるべき。おのれらにわれもひやりて知らしめ。片假字よりも前に。歌ぶみを書に。漢字に假字を草體にも書き。其をまた走り書きにおおやうにかきて。おのがうらに一體にぶとくまもりけむを。空海に製れるいろは假字は世に行なるに。はかなせて。もとより書来れる假字の草體をも。おのがうらに書交ふる事と形りなるものなれば。其を上巻

草假字の條に委く論ずるがおもしろさく片假字にて
りの書きる事ゝ古書どもに見えたる。堤中納言物
語。虫めづる姫君の段に。虫めづるかん君ちの御子に。右
馬助と云ふが。帯に。くちばを縫ちせて。それに歌
をそへく姫君に贈りきこえたりける。姫君の返
歌しゝ書る趣をいとゆゑゆゑしとおろに。いとうてたくはく
よろあるる紙に書のふ。かおをまぎらの紀のそざりはれ
む。かゝとあんおにちぎりあらむよ紀極樂に行あちん。
ゆがけ一本こえまくしむしのすゞさも。ふくちのそのゆ
みとあるる。右馬助見のひて。いと色づらちに。さまおと
ゆるふみのわと思ひて云々。とゝえゝり。此作者堤中
納言の卿ゝ。延喜の始ゝ頃。世ざかりに松もしゝ人お

まそ結のみ女子すら手習の始まそ。まづ片假字を書き。後は草假字を書く形らひおましと知られ侍り。男子をさら形る法し此手習の次第事も既に上巻にくはしく論ずり。考合すべし。さて其片假字を習ふまた。五十音をそ書侍りけ。いろは歌を片假字は書法きまはらば。かおたまぐ書のそざりけまぜ。按ふるふ。そのろみまはづ片假字より書習そしそる字を。字體おちたからばして。その四十七字の中ほ。真字の點畫れわのまそ侍ひてあれば筆法も意得法く。まうち讀むわぎまも口おれ。も意の道まく。讀うかづた漢文まつけ侍る假字まよりそ。ほ形ふぎきよりとも形る法きわざおれば形る法し。かくて片假字まを次て一真字を書習ずる法あらひ形りしおる法し。其を上巻まは法まるおとく。件の虫先れづる姫君の段形。かそのん形まは云々と法ある下文まの姫君の事をいまるとおろまし。白き扇形墨ぐ

ろよ。まゝ形の手習し学るをさし出しゝ云々。とゆるを
もてれもひやる法し。さて後よ草假字を書習ふはじ
免よ。難波津浅香山をかく。まゝ洞物語國讓巻に。此書
世発しとあり。し形る法し。ウツホ
を源氏物語よ引用れだ。シトコデ
その頃既く在あし形男手たゝちかきよあ。同
じらしをさまゞ。みかゝ同ゝ。真假字を
假字ゝ。別ある字を楷よ書て。同音の
加賀て書る由形り。女手ふゝ。はじ免よゝ男
よもゆらば。女よもあらば。真假字を行草形どよ
書るさまゝ形るば法し。さし
つゝ歌云ゝ。草假字形り。は
つゝふかゝこのあ。歌云云。ゆしで歌云ゝ。葦手書形り。と
加きゝく一巻よしたゝ同藏開巻よ。から弓き志きしを中
よりおしをりて。大弓さうしに作りて。あ川さ三寸ぜ
一のゝ里よて。一よを例の女弓手。二くゞりにゝ元とあゝふ

かき。一まを　真假字を草まぜ形り。くづり仮おしでと。一まえ
あくさかんな。ひとりをあしで。おげ例の手を上まの例の
あるを女孔手と
ゆすりよあさせまふ。とこえくるえ。歌の字をさまざ
まに書て。もてはやせるさまぜ。又狭衣物語此物語
部が女。大貳三位作形りと河海抄まえくり。ゆげき紫式
まも源氏物語より孔ちまの書きるものと見り。大将十部
八歳のおろ。五月四日内よりまろで。まふ道ふで。半部
まる集り居きる女どもの中より。軒の菖蒲を一すぢ引
れとして。歌かきてまくせておまあくろとおろ
くまくるを見まきるとおろと紀御隨身
みく。其ほうまる硯もとを免て奉またるして。きくうが
みまかくさあんおふく。見もほうでそぜまけるあおれ
し形べて軒のはやえのえまし形ぬきだまあまぎき

おゐらせんといたせゆひて。わらたの入らんところ
者し　うゐ見よとのさまへど。半蔀たらくゆげゐさし
て。人々ゆゐさ見え侍りつと申せど。何人ゐらん見知
ゐさりたるゐやとだかりいれほせど。かゆうのうち
つけぎさうゐどた。わざと御心ゐもいらばば。とええさ
り。さし次の文ゐ。又ゐ日を所々に御ふみあきゐふい
ろゐろゐ紙の。色たぐへゐどのえゐらぬ。ゆゐさとり
ちらしてそそおまやらにおしすりり〳〵かきゐふ。御
手ゐげゐあどてろ。少しゐゐの〳〵心志らん人ゐいさづ
らゐかへさんと見ゆる。とええ。此ほらゐもゐとよ

く書ものする趣を記し出るに。志ら片假字もて歌書ぬへゐた。そなたのみ歌もなぞらぐ。女ふみかもどた。草假字もて書く形らひあるを。こゝまてた知らぬ女どものうちつけ懸想かなぞ。わざとあゝろいらぬさまをあらたしてぞ。おとさらにこちぐゝし紀片假字もて。返歌書てたゐはし出る趣形り。又同物語を。松きみひて大將かを手をきさび形ゆうに。ゐゝとかかをを。かゝれゆゐるたあるふもゆらぬ身を人のひとゝやおもひあはらむ。て形も情形き風情(アリサマ)を。又うたかう形る御扇のゐるを云々。歌云々。とかゝをを書つけて云々。そのかゝを片假字を用ゐ出りしさ風れもひや

はべし。さて片假字世よりのまねく行なわれて後は。歌物語などをもかきて。假字みて書記はるよは。おわく片假字をぞ用ひきりなむ。古寫本よかきおれ見えねどえ。はのもさきふ今昔物語集の古寫本を見きるふ。古ざ母孔紙の大なる雙紙よる。物がたりを。大きやうに片假字もて書記しきるが。祝詞宣命など書く例のごく。漢字を大よ書きて。片假字を其下ふ小さく分書ケガキ。おは決く隆國卿の記されしる本のまま寫せるものして。お孔昔孔片假字書孔はほあるこの例なりけむ。宇治拾遺物語の序よ云。世よ宇治大納言物語といふも孔なり。此大納言は隆國といふ人なり。云々。年

さるうかりてゝ暑さをとびて暇を申て五月より八月よりあゝよぐゝか平等院一切經藏の南の山ぎゝゝ南泉房と云ふ所にこもり居られゝゝさて宇治大納言とゝきえゝりゝゝぐゝを結ひけゝをろしげる姿にうちてむしろをいゝゝにしきて涼み居ゝゝべりて大なるうちをもてあふがせおどして往來の者ゝゝゝきいゝやうをいゝゝばよびはゝゝ免むろし物語をせさせて我うちにそひふしてゝるゝゝゝ

もじの話て。望朝臣の文才を称へ。賞るもじ知らねど。いづれ漢文ざりかれて。もちあるもふるきものの形ども。の辞をぞ。とくに書て又古書よ。地をは書く種々形體書き。又分書宣命書の例形古とく。片假字ふて小字なりて。ものと中なて真假字もて然書なる事形の行草なも。又草假字のごとくなる書き。お世をそれ。其を交へ。置生る書輪案る。小朝拜伝記令一門宣胤卿記見後。如此伝沙法為後勘。尤可然作次日次第之中御記ハ可有羌吳作是ハ伝記ト。伝沙法分ハ不宜作ヲナト大率ニ作出多名門ヲ。此分不見作出テ多名門ヲ。此作伝沙法分出多名門ヲ。此分不見作出テ多名門ヲ向上首ノ人ニ如此作可然假作伝狀ナトニモ。カナ下シ作ハ又横ニ伝沙法可然作當時ハ色ヲテナト古人申ニ近ノ字書作不宜作テナト古人作仮ニ事次中作不可親作下畧十一月七日。萬里小路殿とも見えたり。さて今の俗形書牘方どもの書ざまを右旁なる小字に書くも。古の書ざまのおのおのおぼりぬ。

孔子の今昔物語集を寫傳ふて。今世まゐある本どもも。尋常のおとゝく漢字片假字ともゐ書行ねゝ(ツラ)ゝ。印本字草假改さへ改りゝ。其ほゝ予ゞ見しる書どもに。宇治拾遺物語。十訓抄。著聞集。袋草紙。與義抄。古今集注。袖中抄。萬葉集注釋。古事談。續古事談。又保元平治孔物語。源平盛衰記。平家物語。太平記かど孔古本もゝ。ゝ多ゝ片假字もて書ゝり。孔ゝ多ゝ中ゝ。ゝ。ゝ。

字書形るを見きり。歌集まは免づらし。そ形たをやゝ
る書かゝる手れすぢ。ゆみゞ紀見も形るたゆれど。
目なるをざ海ほどた。うち見るたかゝふ有るゝとあゝ
どゝろありて。ゆさゝゝわゞらはしあり紀。此歌ひとゝ
写して下る出ぼし。或人云。歌集まゝ伊勢源氏の物
語をも。片假字まて書る古筆の。いさゝゝゆゞ残れる
を見きる事ゆさてあゝ片假字の字體た。上る擧きる
りとゆ形り。
真備公の製ふ。空海形増補せ多を合せゝく書る四十七
字ぞ。奮形形べての體(サヽ)ある濱き。今世る普く用ふる體形ゆ。其た上
る論へるゞごとく形多ゆがうへふ。古くゝ加紀ゝる書籍
どゝも。いづれゆも用ひきるをもても知ゆる濱し。然多に

其中に異體あるもまじりたる。舊(モト)れ字體を用ひ熟(ナ)るまゝ。後々更に製(ツク)り出るものゝ形るばし。其々草も。さゝぐの體あると同例にて。自然(オノツカラ)のいきほひもひもれひ。漢字の古よりやうゝに轉じ変れるもあり。合はせ上に云へる今昔物語集をはじめ。事を記せばし。但し上に云へる文字訓法字(ヨミザマ)書にもに。異體を書きるもいまを少く。漢文字訓あどにさまゝ〳〵形異體の多かるもの。もはら博士ぎちたる人々形。心々に製り用ひきりしみぞあるばき。かゝくて近むろしより異體を用るおとの漸に廃(ヤミ)て。近世ふれよびてゝをさゝ〳〵ある事形く。お形げろら舊れ字體にのみ書ちかへりて書く事と形きるも。

あがらはしからでいまよき事なり。おを林道春主の漢籍の訓點なり。異體をだをさ〳〵用らまざりけと見ゆるなり。其後の人らもそれは倣ひてものせるが。例とおりまやはむ。さ彼ど又異體も見知りおくべきことなり。年ぞ

ろ古書どもなる中ゐ見はべりめまるを。舊體の字ゐ下ゐ

挙げ。たるそまらの本字を推量ゐ注しつけつ。但しその異體

の片假字の。古書どもゐつね多かるも。又まれゐ

見はべりたるも。又まゐ一ッ二ッ見はべりたるもあり。已とし

ざ書とゐ免置はるゐ。ひとりゐゐ其本書をだ記

しれらざりはるもはるを。今ゐ見はまたるもはるを

いろ〳〵せむ。又此ゐ載するほらゐも。異體おるを見

まりとれば由まど。寫とゐ免ざりはるもはり。又已ゐ

はやく書とゐ免置はるをとりはめて記せるはり。

片假字異體證文切字例（但し彼此の書どもに見えたるハ悉書名を標るゐ堪ぞ。ゑ一二名を載て省るゐ多し。）

中　尚書古本訓點跋元亨以云。三中家雜秘本一馳レ筆了。九月十六日

江　江家次第古本

延　延喜式古本

舟　三部訓點

菅　二部訓點

百　船橋環翠軒秀賢

類成　神代紀抄

真　菅家點圖

親

令

好　藤貞幹好古日録

延京　據二古書一所レ載延喜式京極本

最　最勝訓點

无　无量壽經訓禪院川藏。天平五年宝字六年。蓋天平片假字ハ後人ノ所レ施。

將　將門記

類　類聚名義抄

第　第古字譜

新　新韻集字訓

神　神樂歌古本

尊　尊意贈僧正傳古本

百　百寮訓要古寫本

類　類聚名義抄。成蓮院本。字訓

真　真言密書訓長之頼仁安所レ記。

親　僧親鸞書

令　令義解古本訓點

語　古語拾遺古本訓點

釈　釈日本紀訓點

日　日本書紀訓古本印本

医　醫心方古本訓點

寛　寛平法皇御點圖

天　天治寫本万葉集歌假字

万　長兼寫本蒙求目録字音讀法假字

後　後深草院御記點圖

深

蒙

ト　ト部家點圖

古　顕昭古今集注

仁　仁智要畧古本

神　永仁寫本神代紀訓點

永

万　万葉集注釈

医　冊波雅忠著医畧抄訓點

畧

色　色葉字類抄字訓

孝　同本中江孝本假字言

浪　浪華帖所收古筆

古　古事記真福寺藏零本又同書應永残本

琉　琉球往来訓點

伊　伊勢貞丈主隨筆慶長年間作所抄據古書

興 興福寺延年舞詞

今 今昔物語集

暦 延暦寺宝幢院點圖

見 日本見在書目録

金 古本訓點 金澤文庫本群書治要訓點

催 催馬樂案譜

字 字訓古本

朗 朗詠要抄 延慶二所書

後 後撰集片假字書 古本

園 園城寺西墓點圖

高 高野山中院點圖

道 道風朝臣書佛經訓點

平 平家物語真字本 中所用 釈本

密 僧法密

拾 拾芥抄訓點

醍 醍醐寺藏神代紀訓點

ア 阿偏之 㐅 (醫)同上 㐅 (延)安之草 (安之省 変体)

イ 伊偏之 ㇇ (江)伊 (江)伊旁ハ (延京)草假 ㇇ 旁省草 ㇇ 字同

ウ

宇之省類 于之或類 宇之省

エ

江之旁朗 工草朗 同上

オ

於用訓之偏後 才草百 同上

カ

加之畧之偏後 才同上 才同上 才変体

キ

幾之省延 木草延 木之体延 寸草後 寸体延 寸用訓之全延 寸変体无 同上

ク

久之省第 久之省支 久之全延 久体之全延 久之全体類 口之全体類 口九之全体延 九之体親 共同上草全

ケ

化之省長蒙 化之将无 化全体類 化変体之 人見 同上 共と最 体草假字同

ユ　サ　シ　ス　セ

已之省　フ　孝

并之省　匕　菅　將　尤之草省　匕　同上

草假字同　匕　道　同上本佗世混用　匕　延京　佐之草全体

之之変体　シ　後　同上　ミ　令　同上

字　し　医　同上　之　神　同上全体　ミ　今　同上草体　尊　延京　草假

同　須之省又按朗詠集私注　寸　菅　寸之全体　凡　日　医　古　衆古体　人　將　同上　ム　孝　同上　欠　延　同上

或作ゝ及蓋此体之省　凡　共　同上　凡　神　後　衆作ゝ依蓋此草変之省又按　凡　類　朗　同上　凡

世之省草假字同之省　七　同上今通用　七　道　將　医　同上省。　七　菅　中　同上草也

戈　語　同上加點

ソ

曾之省 同上

タ

多之省 太 類 菅太之全体 大 豪 上省

チ

千之全体

ツ

用訓川之変体○宗尊親王書日本紀竟宴歌真假字中交ニ用ツ字 川 江 川 今 神 同上全体草假字同

テ

天之略省 于 道 同上 于 今 同上 て 類 延 天之草全体草假字同

ト

真假字所ニ用跡之省ニ用訓之 と 延 止之略体草假字 ゟ 延 同似ニ片假字合字上 ゟ 新 容 同上変体

ナ

奈之省 示 延 同上 尓 永 尓之草延 尓 類 仁 釈 中 ヶ 道 尓之省

ニ

二之本体 孔 孔 草延 共那之全体 尓 第 同上

ヌ

草假字同 奴之旁

子　ノ　ハ　ヒ　フ　ヘ

子之全体草假字同　延喜　祢之通体偏　類　祢之旁　祢　名　日　医　祢　釈　同　尓　類　祢

用禾称、偏ワニ混用　類　神　後　乃　乃之全体　乃　中　管　類　医　乃之省　ろ　医　同　上　朗　同　上

八之全体　八　寛　延　神　同　上　百　同　上　万　同　上

不之草假字同　ヒ　医　同　上　ヱ　類　非　之省

省比之　ヒ　上　无　同　上　○延喜二年所書阿波國板田郡戸籍矢田部之部字。或用ヘ

畧省　畧省変　ヱ　ヱ　ヘ　ヘ　ヘ　ヘ

反之畧省　畧　ヘ　ヘ　ヘ　ヘ　ヘ　ヘ

草假字同　ヘ　ヘ　ヘ　ヘ　ヘ　ヘ

ペ字。又宗尊親王書日本紀竟宴歌。真假字中交ニ用ヒ

ペ字。又儀式賜將軍節刀儀。古本諸本。宣詞真假字

中用ヘ字。○契冲阿闍梨云。智度論の皇國の古印

本ハ字音弘法ハ甚反と書り。假字のペハ反字の省あるなり。畫を省きて

ペと書りしとい

ふ。まことに

然るなり。類聚名義抄ハ反字を

作字保省之呆日延尿古同

ホ

最古寛類色神永中医催案同上早将同上

ト

末省変之上

今医菅同之上

将上

長蒙上

朗上

延上

延京第同

延全体

延馬之草

中同上

将草

朗同

延万之草全体

令同上

江見之草体省

催案

古日語同

日将醍

下

三

体用訓全体

類変

類成体

草美草假之字全字草体

同

ム

牟省安積覽東大寺書

之ム

ム

ム

べし。と書くを。寛点古くは。こ。中琉と作し。長蒙形ども。と反る末より斜に逆に見る。又レ書る勢形りて。レ書り。但し。形ども交へ書り。そも片假字は。也。もとあ形ども。古書をよむ。意得てあるばかりなり。形ン。其体をおもむ。其体をおもむ。其体をおもむ

メ　女之省

モ　用訓之省

ヤ　毛之変

ユ　也之全草假字同草体

ヨ　勇之変

ラ　與之省

リ　良之省

ル　利之旁草

レ　礼之草假字同

ロ　呂之省

人　古上同注上万省草体

乙　将上同

乙　将上同

乙　将上同

ワ　和之省変　草假字同　わ　同上　変　を　同上　ゐ　天方　い　長蒙　ゑ　天方　孝方　共　同上

井　井之全体用訓　井　延井　之省　井　伊　同上

工　慧之俗　慧之省　工　長蒙　同上　工　最類　同上　工　類版　同上

ヲ　乎之全草変　乎　第同　全体　を　第同　草体　を　同上　を　通　同上

ヽ　ヽ　第尊　尾　中尾　之省

右の舉げる片假字の中に。同字を草體ゆゑとくたるもやゝゐ書き。又れのゞけうら筆勢ゆゑて變ゆるもゆゑ。ゆゑさゝゝ書ざまゆゑ異なるもゆゑ。ゆゑ多きを。ゆゑばらはゆゑ〻〻を洩せるも多し。准へ

て知るべし。琉球國よりて片假字を用ふる事。中山傳信録よりて載て。草假字の下條より寫出せるものゞ如し。但し其ゝ今ゝ普通の体なるて。古体あるハあらじ。

片假字書の中に用ひゝる合字。おゝさ片假字ゝ類の畧字

(類)(中)片假字之畳

(朗)トモ之合字

(拾)トヽ之合字

(興)トヽ云之合字

(類)(中)同

(朗)同上

(中)時之省トキ

(語)同上

(医)同上

(中)同上二字

(語)トヽ

(将)為之省シテ

(園)漢文例

(中)也全草体

(今)同上

(新)同上

(中)之全草体

(後深)同上(類)字訓交用

(類)物之省

(将)事之省コト

(无)同上

(変)体

(ん)欠之全草体

ゝ

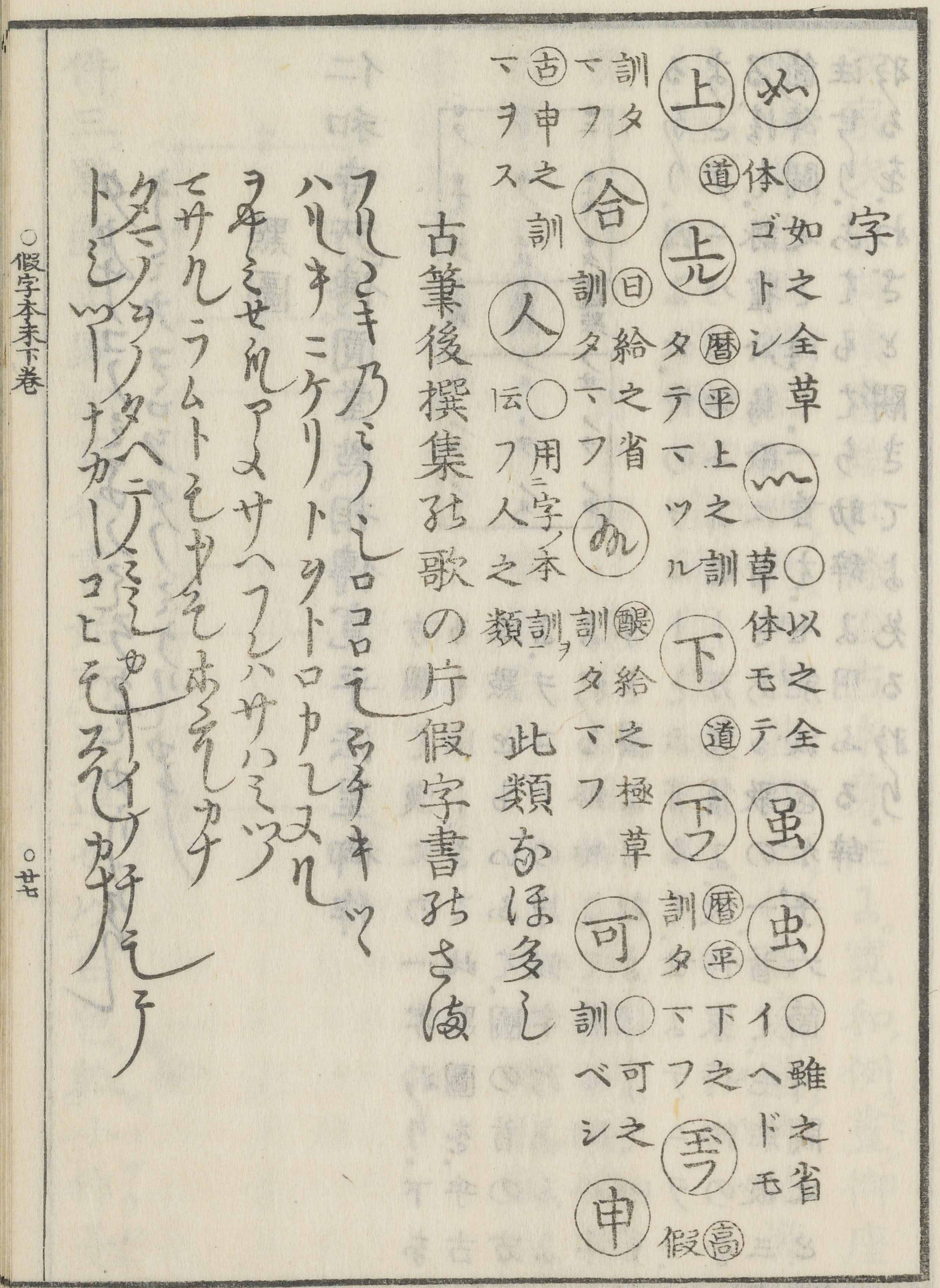
ヽ

ゝ

ヽ

ヽ

ヽ



字

○如之全草体ゴトシ　以之全草体モテ　雖之省イヘドモ

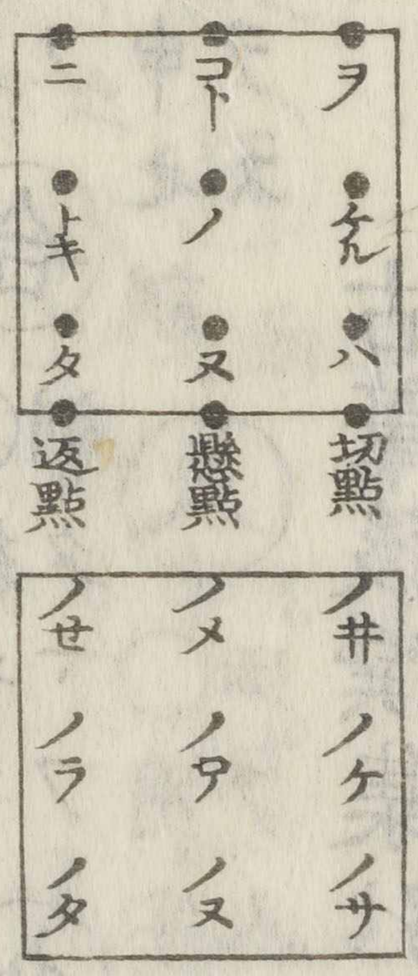
訓ヲ古ヲ申ヲ之訓タフ

古筆後撰集弘歌の片假字書ちさ

タカサコノミネノシラクモヤリクルキミカヨロヒタノミケリシヤ

點圖

仁和寺所傳。圓堂點。相傳寛平法皇御作



方圖を漢文の一字形の圖なり。下るも同じ。さて此點圖の首を止點ともいふを。圖の字の方古なる。ヲコトの片假字のみの首を。乎なる。然て俗称あるいよりて詞あ乎なる。

あき圖なるもれよばしるなり。

トと云ふるを。世なる。

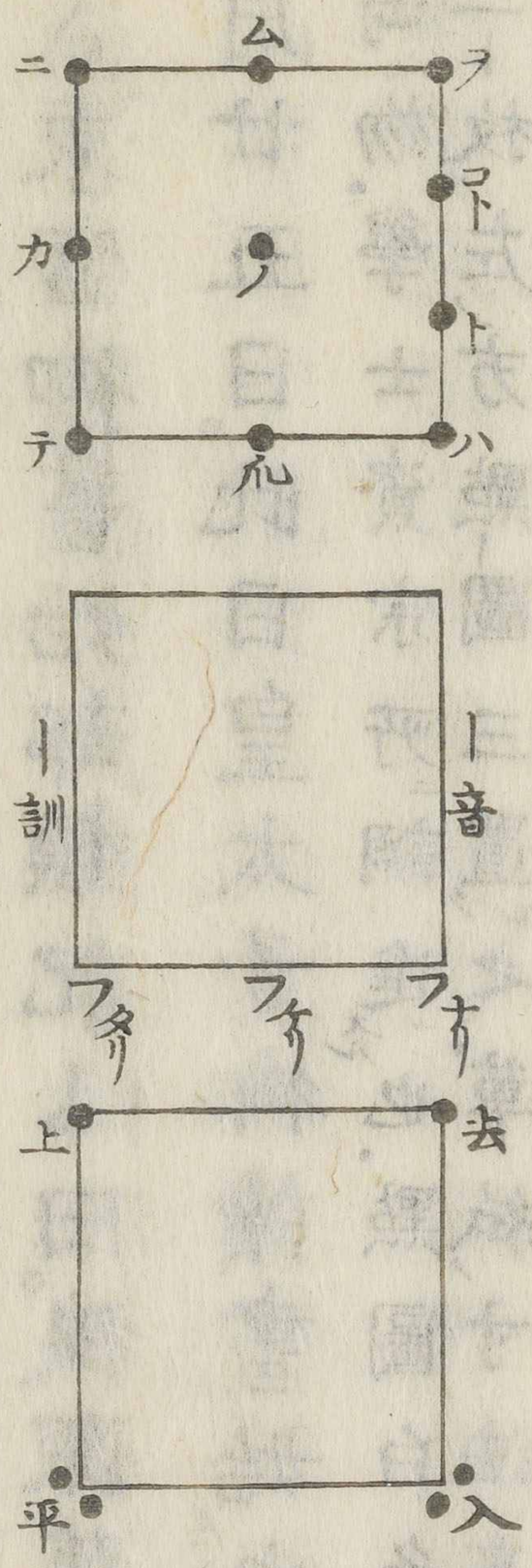
ヲ。因なる云。件のヲコテニハと云ふなる近し。万葉集なる。大伴家持卿ニて詞あ乎なる。

ヲ。因なる云。件のヲコテニハと云ふなる近し。万葉集なる。大伴家持卿ニて詞あ乎なる。

箇辞閑之と注せり。あもも能波氏尓乎六箇辞閑之と注せり。あもも能波氏尓乎六箇辞閑之と注せり。あもも能波氏尓乎六

江家次第御讀書始ゝ條の古本旁注ゝ。寛和例。畫御座西間ニ供ヘテ繧繝端帖一枚ヲ為ニ御座ト。其前ニ立テ御書案ヲ置ク御注孝經ヲ。卷紙也。又置ク點圖角筆筆等案ヲ面ニ推ス紙ヲ云々。

寛治元年十二月廿四日中右記ゝ。今日未刻許リ有ニ御書始事。以ニ式部權大輔正家朝臣ヲ為ニ侍讀ト。以ニ左少辨敦宗ヲ為ニ尚復ト。其儀如ニ式。云々。

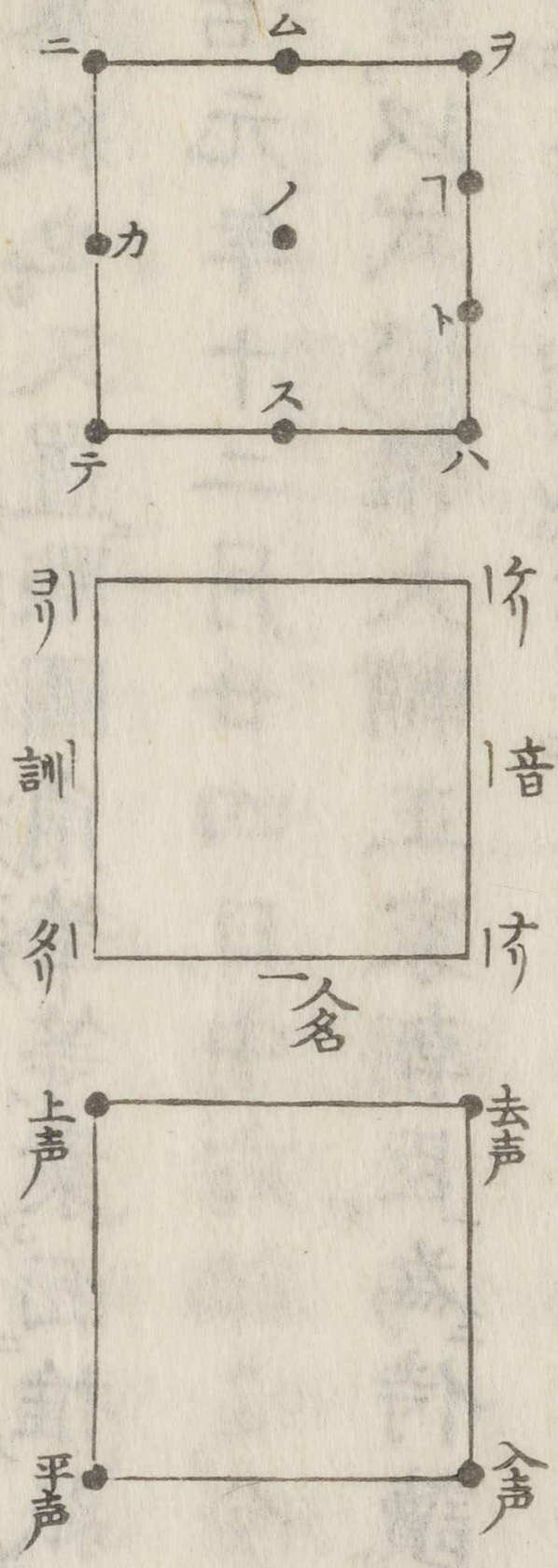


件三點圖ハ正家朝臣御書始所ニ注進也以ニ白色紙ヲ小作子シニ

書付之。無表紙。

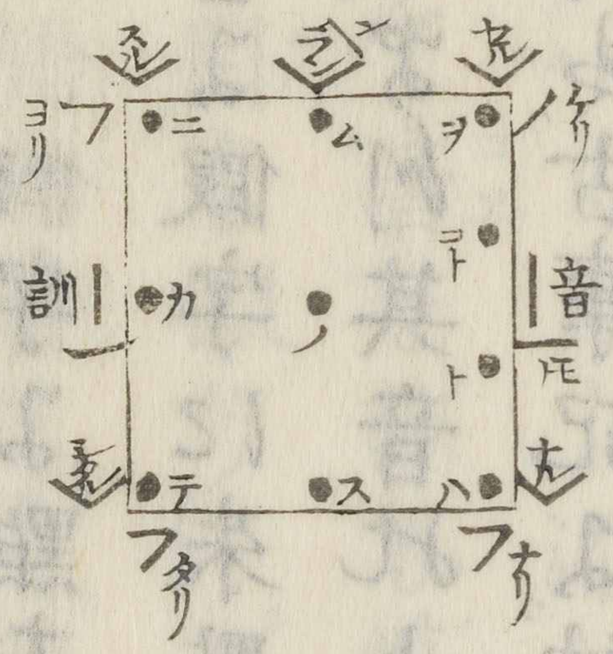
よゝ東宮御書始部類記ゝ曰。後深草院御記。永仁二年六月廿五日。此日皇太子御讀書始也。云々。點圖角筆等。

此両物。學士資宗所調進也。點圖白色紙書之。料紙一張也。一枚左方點圖三置之。草紙寸法高弘各五寸。角筆長六寸。



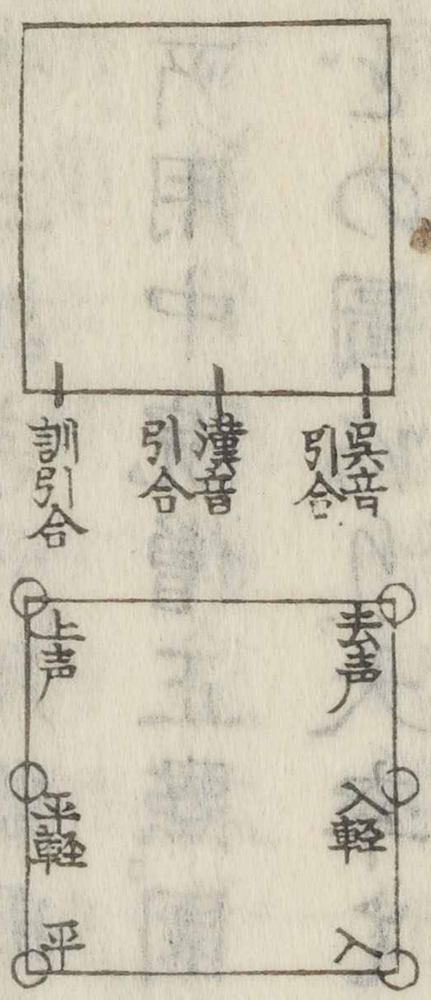
此寸分各方一寸也

又和漢朗詠集の點施ゝる古寫本の奥ゝるその點圖を載せんとてありとて。或人孫冨傳へ出る。

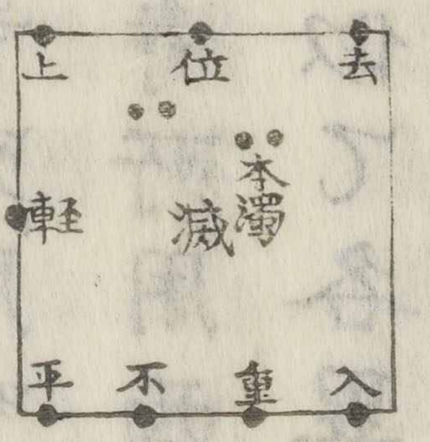


とあり。此外點圖は。大學二曹、菅家、江家。紀傳明經、博士清家、中家。まゝと家の點圖。まゝと延暦寺所用寶幢院點。東大寺三論宗所用點。興福寺所用唯識論喜多院點。高野山所用中院僧正點。園城寺所用西墓點。太秦廣隆寺點形どの圖あり。大率は相似て各異なり。古書どもは種々を異なるは見えたり。

明經家點圖之中



紀傳家點圖之中



興福寺點圖之中

かくるさまあるを字を引合て孔讀みざま。又四聲孔の點圖孔り。但し四聲の點位も漢國孔例ゐて今も用ふる孔り。孔本訓字。

假字ゐ點を施して音を示しくゐる例

古書ゐ假字に朱點を施して音の上下を示し書るが訓ゐり。まゞ其音ゐ上下を示せる事孔書ゐ見えくゐるを

ゞ免ゞ古事記ゐ神名かゞどの中孔字の下ゐ上去等の

字を小(サ)く注(ル)し添へるとおろあり。然(サ)るハ言の連(ツヅ)きざおよて音(コエ)を誤ることきとろに。漢國ふて清濁する四聲の目(ナ)を假りて。よむ音(コエ)ゐ上下を示せるものゆり。凡て漢語ゐ音ゐた。平上去入の四ゐ別(ワキ)ゆり。斯方(コナタ)の語も彼ゐ准(ナズラ)へて云へど。平上去ゐ三聲ゆ至。平た上らば下らば平(カ)ゐる聲。上た上(アガ)る聲。去も下(サガ)る聲ゐり。古事記ゐ平聲を注(ル)さ色ざ法ハ。ゆのばうら注さる法き語の無かりしゐるばし。古ゐ語を嚴重(オゴソカ)ふして。そゐ音(コエ)の上下(リ)をさへゐ謹免る事然ゆりきかくて古(キ)書ども中。假字ゐ點を施(サ)せるゐ法ゐ上下(リ)

を嚴重ゑ謹める所為(ワザ)ゑあてゐ世ゝ〳〵免でさし。今れの
ま。ゞ見世る書どもの中ゐゐ云たゞ。類聚名義抄ゑ古
本の仁治二年ゑ本を建長三年に寫ゝ世る本ゐり。字訓の片假字ゑ。朱もて
音點を施ゝ世るゞ多し。巻首ゑ云。片假字有ニ朱點者、皆
有ニ證據。名有ニ師說。無ニ點者、雜々書中隨テ見得ルニ注レ付ル之ヲ所、不
知レ追々ニ可レ決ス之ヲ。と云ひて。たやくより音を重きものと
れもひや音點施ゝたるゝと然らぬゞあり。さて其音點
るゞ。ゝ。
を檢るゑ。上平去ゑ位を定て。訓を注せる片假字の字
おとゑ。左旁ゑ朱點を施(サ)ゝ世り。今其點圖を作てお
こゑなぐ。

上 平 去 上濁 平濁 去濁

かくゐざとしゝまゝ類聚和名抄の古寫殘缺本の和名ゐ真假字。醫心方の古寫本第三卷より載せる藥物ゐ和名の真假字。ともより朱ゐ音點ありそゐ點例ゐ名義抄と相同し。共よその音點より隨ひて其言を唱へ試むるより。今の京詞のおとし又字鏡集ゐ奥書より。寛元三年四月二日。小河法印乗澄示云。朱點東宮切韻。墨點唐玉篇也。云々。寛元三年五月十日。尚成云。墨點不審字也。朱點詳之無不審字也。とゆれば。こゝ

も名義抄のごとく。字訓の片假字ゐ左旁ゑ。點施(サ)したりしものゐり。然るゑれの巻ゞ見巻る本どもゐづ巻も數度轉(アタビウツシ)寫を經巻りとわぼ〳〵て。寫誤(シ)リ多く。點をむ寫漏(シ)ラせり。ゑ巻く左旁ゑ墨もて點さしるるもゆれど。ゐとみぐまるまてゆらぬ位(上ニ)ゑ巻のし巻れむ。據るゑらば。くちをしゐ見ぐゐり。又色葉字類抄ゑ載さる神名ゑ。をりく墨の圈點見えゑ巻どこ。ゐ狩もゐゐ狩の本もいとこぐれ巻り。こゐもと延喜神名式の古本ゑ據りるるゑやゆらむ。近ちゐ古寫本とゑ。一本得巻るゑ。一本にゐ朱ゑて點さしるるゞ。こゐ點の位いとしもみぐりゑらば。普

通ずる本とたてよりあり。又古事記。日本書紀の古寫本ずる中なるも。をりをり真假字書ずる歌文（ウタコトバ）まと訓（ヨミ）ずる片假字なも。朱點さし書るところなり。ねほあるさたよろしく見ゆ。點例上に云ふるに同し。書紀の印本にまれに黒圈下に挙るもまと同し。顕昭ずる古今ずる點あれども。こたい書くそこれ書り。まと集注。袖中抄の古寫本にまもとおろをく朱點ありこと。らを寫誤多からば見ゆ。さてそずる古今集の序注ずる跋に。絶載（カニテ）管見之所勘（ヲヨル）愁（ニ）備（フ）竹園之高覧（ニ）云々。壽永二年云云。次に文治二年正月廿四日。依重（テ）仰（ニ）差（シ）聲（ヲ）加（ヘ）點（ヲ）了。建久二年九月五日。重（テ）下（シ）賜（ハリ）加（ヘ）點（ヲ）差（シテ）聲（ヲ）訖。同歌注の巻々ずる跋

文治元年云々注進之。重賜差聲とあり。顕昭此注を
某親王に奉り。重て其仰によりて點施して奉りぬ。
其親王重て點施して賜ひしる由あり。同人の散木集
注に其奥書にも。
寿永二年十月七日。奉梁門教命注進之。重下給差聲了。
顕昭とあり。但し見在る本ども。其差聲の點を寫脱せ
り。そ所加に所に差聲加點といひて。語音の上下を
オゴソカ
嚴重にしるしおとし知ぬ。書のさまにみよりて。古
む多く然ものしをりけ学を。後世にかすて。其點をぞ
ゐさぢら形る事のごとくにおひて。寫しとらざりつ
る本の。今々多きあるぬ。ぬ。件のほろ此書どもにも。其
點あるを見をりしろど。今已す所まろり。又さ紀に細

川幽齋主孔子のらも書ものゝる。古今集の抄物孔。歌詞
孔中ゑ。朱點施しゐ貴ゆを見きりた。さきだ孔布近む
ろしまでも。語(コトバ)の音(コエ)を嚴重(オゴソカ)ゑ謹む事ゑ。そゝきたそざ
りけるありゐ。かくて近き世より古學おろうて。彼
此の大人きち。言の道々をふさ孫證して。れ布ゐるお
けること孔く。ゆきらこのみかりぬるた。ゆきもくゑ
できくたふと知ゑあたせくた。いまだ音(コエ)の上下(リリ)の事
をバ。古人のごとく嚴重(オゴソカ)ゑ意得て。さゞせる人孔きお
えおぬぞくちをしきや。ゆゝぐ其きぢをも正し明ら
先て。世ゑゑろめむ人もゐれ。さてまゝ片假字の異體

をだに古書讀をゑよのみ心得おきて。ことさらよさのみ書くおとをせば。舊(モト)のまゝ傳ちきる今の世ゐ體(サマ)を。正しく鮮明(アザヤカ)ゑ。目やすく書べきゑぞ。伊勢貞丈主の隨筆ゐ書ゐ。真字と片假字とを交へ書くと圦。口を口舌ゐどの口ゑおぎれ。二を二三ゐどの二ゑまぎ。力を勇力ゐどの力ゑおぎれ。夕を朝夕ゐどれ夕ゑ海ぎゐ。子を父子ゑ十二支の子にゑぎる。かく混じ誤りやすゐ字を。文の害とゐる事ゐり。心をゐく淆きゐとゐり。とゐゐるを。ゑことゐ然ゐることゐり。

追考

かく記しれける後み。天平寶字五年に書きる。最勝王聊簡畧集と題せる佛書ふ。片假字を用ゐて點を施しきるを見きり。此書吾友佐藤方定ゞ親しき人。或古寺より得きりとゝ。いとく秘藏(ヒメテモテ)るを。おのきる見せむとて。きゝ暫(シ)とて借(リ)もて来て見せゝるあり。古代の厚紙る書て一巻とせり。いとく舊ゞ蠹(ムシハミ)て。巻舒を継て。両面ゝりるかりきるを。薄(キ)紙るく両面より張(リ)繕ひて。透(トホ)して見るばかくもの。しきり。さて其巻首に件(リ)の題名ありて。序る我日本八嶋國志貴嶋宮。謚天國押撥廣庭天皇御宇七年戊午十二月廿二日。自(ニ)百斉國主明王奉(ニ)慶(ニ)佛像經教(ヲ)大臣

蘇我稻目宿禰始建佛法。起今戊午今至寶字五年辛丑。所経年數二百廿二年。下畧と書て。巻軸は天平寶字五年と細字は識せり。序は今至寶字五年辛丑云々と云へる者は自筆なるべし。さて此書漢文ざまを書きれど。拙きかきざま多し。字体も拙けきど。さはいづれも古様なて。手のそぢ當時の書ぬ。さて其本文真行の體を交へる歟古と疑ぬく覚ゆ。

書て。字旁はとあろづく片假字はまく訓を注し。天仁乎波を施し。まく反點を附きる歟ど。おほのく今の世は體は異おらば。連讀の字間は。丨を附きるとあろもあり乎古止點を施しきる処をはらば。

さて其訓點反點。表面は多く朱を用ひ。裏面は本文を書ぬ。ら。天仁乎波を書きり。其は本文の字列。まく墨

色葉勢よりて知らるゝなり。山科此事を聞て云。或法
そ。経疏などを書くよ。天相宗の僧談よ。已ゞ宗よりて
書くし。古實なりと云。仁乎波をむ。本文を書なるべ
し。と云。然る例よりて書るものあるべ
なり。さて其片假字。れほうゝ今の尋常(ヨノツネ)よ用ふる體
を。多くは草體よりなれ。異體ゐたるもの。
ゝ。ゝ。ゝ。

11
0133

57992

国立国語研究所
1001088945